

豊崎由美 書評家

リアル書店で生身のお客さんを前に、あらかじめ選んだ50冊ほどの本を香具師のようにお勧めしまくる。そんなフーテンの寅さんならぬ「フーテンのトヨさん」というイベントを時折開催している書評家のトヨザキと申します。八戸ブックセンターさんから初めてご依頼たまわったのは2017年。以来、毎年お招きいただいているのは、大袈裟でも何でもなく、光栄かつ幸福と受け止めている次第です。

というのも、まず、このブックセンターがあらゆる意味で“美しい”からです。外から見えるガラス張りの店内は天井が高く開放的。棚の作り方が知的関心をそそって独創的。セレクトされた本たちが好著揃い。予約できる読書会ブースとカンヅメブースは居心地が良い。初めてここに足を踏み入れた時、「八戸に住みたい」と思ったくらい魅力的な場所になっています。

次に、「本のまち八戸」という市政コンセプトへの共感。ここ20年来ずーっと、「読書ばなれ」というネガティブな言葉ばかりがつきまとう出版界の片隅にいる身としましては、町おこしに本を取り上げてくださったことが嬉しくて、嬉しくて嬉しくてならないのです。

書評家という仕事柄「どうして本を読むようになったんですか」という質問を受けることがよくあります。もちろん第一に「楽しいから」なのですが、その後に「本を読んでいる間、“わたし”という小さな檻から抜け出すことができるから」という理由をつけ加えたりもします。自分とはちがう誰かに心を寄り添わせ、ここではないどこかに心を飛ばす。そのことで、わたしはエゴという小さな小さな檻から抜け出して、他者の喜びや悲しみを共有し、日本とはちがう常識や慣習で成立している世界への理解を深めることができる。わたしにとって読書は、自我という小さな輪郭を(ほんの少しかもしれませんが)拡張してくれる大切な行為なのです。

本と読書を大事に考えてくれる街。その中心を担う八戸ブックセンター。だから、ここに招かれるのは書評家のわたしにとっての誇りであり、大きな喜びです。フーテンのトヨさんとなって売り場に立ち、本を愛する八戸の皆さんと交流し、自分が「面白い!」と確信している本をお勧めする。楽しくないはずがありません。新型コロナウイルス禍にあっとうかがうことができていないのが無念でなりません。前回はフーテンのトヨさんだけでなく書評講座も開催しましたが、楽しかったなあ(遠い目)。というわけで、また呼んでいただける日を首を長くして、さらなる読書で小さな輪郭を拡張しつつお待ちしております。

八戸ブックセンターよ、永遠に!

豊崎由美 yumi toyozaki

書評家

ブック・ドリンクス「“フーテンのトヨさん”が八戸にやってくる!」(2021)

執筆・出版ワークショップ「書評の愉悦ブックレビューin八戸」(2021)など

1961年愛知県生まれ。東洋大学文学部印度哲学科卒業。編集プロダクションを経て、フリーのライターとなる。「TVBros.」「共同通信」「週刊新潮」などで書評を連載。著書に『勝てる読書』(河出書房新社)、『ニッポンの書評』(光文社新書Kindle)など。

